

現代の家族が抱える 複合する健康課題の解決に向けて 地域ケアシステムを デザインするためのガイドブック

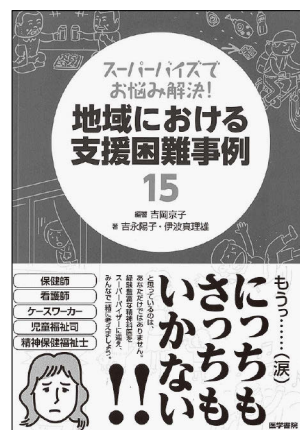
評者◎武田世津

山形県庄内保健所

スーパーバイズでお悩み解決！ 地域における支援困難事例 15

吉岡京子（編著）

本体 2400 円＋税／医学書院（Tel：03-3817-5650）



地域の中では高齢化の進展により、65歳以上の夫婦のみ世帯や単身世帯が増加している。晩婚化、少子化も相まって、人口ピラミッドは杯型へと姿を変えようとしている。また、社会保障・人口問題研究所の推計によれば、2035年には高齢女性の23.4%、高齢男性の16.3%が一人暮らしとなるという。これまでは一人暮らしの高齢者といえば圧倒的に女性が多かったが、今後は男性の一人暮らしも増加していくとの報告がある。

これまでセーフティネットであった家族は、支え手としてのマンパワーと、絆というネットワークを併せ持っていた。しかし、現代ではそれが脆弱化している状況を社会のどこにあって也觉得。地域で暮らしていれば、昔は隣の家の事情がよく見えていた。今は一軒一軒の家族の顔を知ることも難しい。何らかの問題が地域の中で気付かれたときには、それは困難事例となって公になる。そうになると、誰が、どうやってその家族の問題に介入していくかが議論になる。多くは、最初に問題になったテーマにより担当窓口を持ち込まれる。緊急性から健康問題が最初の入口になりやすい。しかし、そのときにはすでに問題は複雑多岐にわたり、対処は1つのポジションで完結できなくなっていることも多い。多分野での検討、連携を図りながら時間をかけてようやく解決の糸口を見いだす。そんな経験を、地域保健

に従事する多くの保健師は経験している。

家族の機能が発揮できない状況では、社会的なセーフティネットを新たに構築していく必要がある。その人に合った地域ケアシステムをデザインする。それが保健師の地域保健活動である。病の発生から回復に至るまで暮らしがどう変化していくか、その過程を見越してアセスメントし、解決策を検討し、実行していく。対象が個でも集団でも、ロジックは同じである。

本書は保健師の日々の活動で直面する、さまざまな人々、家族、住民の問題に対してどう向き合い、誰とつながり、解決へのケアシステムをデザインするか、その過程に対するスーパーバイズがたくさん詰まっている。

読み進めて行く中で、過去に評者が遭遇した事例に類似したものがあり、自分のアセスメントを振り返る良い機会となった。国民の生活を守り、健康を守り、公衆衛生を守る。そして地域の人々がつながり、支え合える地域を創る。そんな意欲を引き出してくれる本書との出会いに感謝したい。

本書は、側に置いて実際の事例への支援に生かしていけるガイドブックである。地域保健、産業保健、病院、教育等あらゆる場で看護を展開・実践している方々にぜひご一読いただきたい。